

— 目 次 —

総 説	1
は じ め に	1
図画工作科の学力	1
図画工作科の目標と学習活動	2
図画工作科学習の独自性	2
図画工作科の学力と学習指導	3
学力検査問題年度別一覧表	5
分野別問題数および正答率	7
学力検査問題と学習指導	8
Ⅰ 描 画	8
Ⅱ 図案（デザイン・配置配合）・色彩	14
Ⅲ 鑑 賞	23
Ⅳ 工 作	38
Ⅴ 実 技	49
ま と め	62
あ と が き	65

総 説

はじめに

この研究は、本県児童生徒の図画工作科の学力を向上させるためには、学習指導をどのように改善したらよいか、ということについて研究しようとするものである。

今回は、この研究の一端として、本県における最近五か年間の高校進学学力検査（図画工作科）の結果を検討し、それによって本県生徒の学力の傾向や欠陥を探り、今後の図画工作科の学習指導にどのような改善をほどこすべきかについて考察を試みたものである。

もとより、高校進学希望者を対象としたテストの結果のみで満足すべき結論が出るとは思われないが、これをいとぐちとして、さらに「全国学力調査」とも並行して、今後も研究を継続していく計画である。

この研究が、図画工作科学習指導の反省資料となり、指導法改善の手がかりともなり、生徒の図画工作科の学力向上に寄与できれば幸いである。

図画工作科の学力

本研究が、生徒の学力の傾向や欠陥を探り、それにもとづいて今後の学習指導の改善を目ざしていることは前述の通りであるが、図画工作科における学力とはどのような性格と内容をもつものであろうか。

いま、学力そのものの定義や、構造論はしばらくおくとして、もともと教育には目標があり、目標を達成するために、各教科の学習が営まれるものであるが、各教科にはまたそれぞれ分担すべき独自の目標や性格があるはずである。

したがって、図画工作科には、それ独自の目標や性格があり、日々の学習の結果、どれだけその目標に近づくことができたかの評価によって、生徒の図画工作科における学力が決定されるわけである。それでは、図画工作科の目標をどのように考えたらよいだろうか。

図画工作科の目標と学習活動

今回、改訂された中学校「美術科」は、現行の図画工作科と本質的には大きな変化はなく、むしろ、それをさらに純粹かつ明確にしたものと解されるので、つぎに「美術科」に示された目標をみることにしよう。

それによると「美術科」は

- 1 美術を通して人間性を養い
- 2 美術的な能力を生活に生かし
- 3 生活を改善向上させる能力、態度を養う

ことをねらいであるとし、それを実現するための直接的な学習活動は、表現と鑑賞を主体として示されているが、理解や技術もそれらと一体なものとして学習されなければならない。

したがって、われわれは、これらの学習活動の成果を判定評価することによって生徒の学力を知ることができると思う。

図画工作科学習の独自性

図画工作科の学力は、上記の学習活動の成果の判定評価によるとはいてもそこには図画工作科独自の性格からくる大きな困難性がある。

1 表現の学習

図画工作科における表現が、もしも外界を客観的に、正確に描写するという仕事であるならば、対象という正確な基準があるわけだから、それにあてはめて生徒の学力は容易に評定できるであろう。

しかし、図画工作科における表現とはそのようなものでなく、対象をどうとらえ、どう感じ、どう表現したかが重要であり、あくまでも直観的、主観的なものである。

したがって、きめられた一定の尺度をもってはかることのできないものであるし、ここに表現力を考える一つの限界があるといえる。

しかしながら、表現は、人間の思想感情を、純粹に問題とする以上、他の「見る人」に当然共感を呼びおこすものであって、表現過程や、表現された作品には、普遍性、客観性もまたあるといえる。その意味から表現は個性的

であるとともに、普遍性をもつものといえよう。

ここにわれわれは、表現力評価の可能性を信じているのである。

したがって、生徒の作品に接する時、具体的には用具材料をどのように生かし、それをいかに効果的に使用して、色や形による作品として完成したかをみるとともに、その奥にある生徒の個性的な創造性、芸術性をみぬくことに努力すべきであろう。

2 鑑賞の学習

鑑賞は、美術作品や自然などの持つ美を感得する学習であって、一見、受動的な行為のようにも思われるが、作品を鑑賞ということは、各自の興味にもとづいて、心の中で選択したり、単純化したり、強調したりする創造活動であり、表現学習が外的な創造活動であるとすれば、鑑賞は心の中での創造活動である。

したがって、表現力の評価と同様に、困難性の多い学習活動である。

たんなる作品の由来や、作者の伝記的な知的鑑賞に終ったり、教師の独断的な解釈を強要したりしては、決して、創造的な真の鑑賞学習とはいえないであろう。

3 理解と技術の学習

以上述べたように、図工学習の基本的な活動は、表現と鑑賞であるが、これと一体的な関連をもつ学習活動として、理解と技術の学習がある。これらは何れも表現や鑑賞と深く関連し、鑑賞、表現力が高まるにつれて、技術、理解は進歩し、技術、理解が高まることは、すなわちまた鑑賞や表現を効果的にする。

図画工作科の学力と学習指導

われわれは、いま、図画工作科の学力についての考え方を述べ、他教科にはみられないその独自性の故に、学力のとらえ方の困難性と、学力を高める学習のむづかしさを知った。

しかし、われわれは、その解決に向かって努力を重ねなければならない。

今回の、「高校進学学力検査」を資料としての研究は、今後の、学習指導の改善を旨としてのいとぐちと考えている。

研究の観点

高校進学学力検査は、高校入学者選抜の資料を得るために実施されるものではあるが、その出題にあたっては、これによって、県下中学校の図画工作科教育を阻害するどころか、むしろ積極的に、中学校図画工作科教育の正常な発展を助長することを旨として慎重に考慮され、くふうされているのである。

こうした観点から、五か年間の高校進学学力検査問題を、各分野別問題別に一題ずつ提示して、それを解説するという形で記述を進めた。

各問題ごとの記述形式はつぎのとおりである。

1 問題のねらい

各問題が、直接には何をねらい、間接にはどのような広い背景をもっているか、すなわち、一つの出題は、ただ、漠然と切り離されたものではなく、それと密接に関係している一群の学習内容があるはずであり、一つの解答を求めることは、それら一群の学習内容が、いかに生徒の学力として身についたものになっているかをみるがためである、これが「問題のねらい」である。

2 生徒の困難点

問題の性質によって、正答率にかなりの開きがあったり、地域や学校によって、ある傾向が感じられたりしたとすれば、そこに、われわれは当然分析の目を向けなければならない。

もちろん、今回は、生徒の答案の一枚一枚を検討することはできなかったが、中・高校教諭の協力によって、五か年間の結果をとおしてみると、そこに共通する生徒の困難点を推測することができた。

3 指導上の留意点

以上「問題のねらい」「生徒の困難点」を、だいたい明らかにすることができたとすれば、われわれは、そのある傾向に対して、今後の「学習指導上の留意点」を提言したいのである。

すなわち、その問題のねらいに関係する学習内容を中心に、指導上の要点をあげた。

そうした指導上の要点はなぜ必要か、さらに、こまかい方法上の留意点

にどのようなものがあるかを、問題解決上の直接的な困難点や、学習上の困難点、または、その学習内容の望ましい理解構造などの観点から、総合的に考察し記述した。

学力検査問題年度別一覧表

昭和30年度

分野	問題番号	問 題 の ね ら い			正答率
配置 配合	[1]	室の配置配合、特に合理性、機能性からみた配置のしかたについての理解			37.5
工作	[2]	木どりのしかたに関する基礎的な知識・理解			15.9
色彩	[3]	色彩の特に加算混合、減算混合についての理解			27.4
鑑賞	[4]	絵画鑑賞および絵画表現の基礎的な知識・理解	イ	表現の用具	82.5
			ロ	表現の方法（線の特徴）	13.4
			ハ	対象をどのような観点でとらえて表現したか	40.3
			ニ 1	華山の美術史上の位置	14.5
			ニ 2	セザンヌの美術史上の位置	17.0
実技	[1]	クッションの図案を題材として、リンゴの断面図を便化し、それを構成する技能および配置の能力をみる			51.8

昭和31年度

分野	問題 番号	問 題 の ね ら い				正 答 率
工作	[1]	工作法、特にくぎづけによる接合の理解				37.1
色彩	[2]	イ	配色、明視の原理についての理解			51.4
デザイン		ロ	デザイン（用を基本とした美）の基本的な知識・理解			84.3
鑑賞	[3]	イ	リズムの美しさ			8.4
		ロ	比例の美しさ			5.9
	[4]	美術鑑賞の基礎的な知識（構成美）				12.6
実技	[1]	透明のガラスコップと音楽の教科書を素材として（質感）物の描写力をみる				50.2

3.99

昭和 32 年度

分野	問題 番号	問 題 の ね ら い				正 答 率	
描画	[1]	二点透視図の理解				55.7	
工作	[2]	イ	版画の材料（版木）の種類や材質についての知識理解			19.1	
		ロ	木工作の塗装の目的についての理解			71.9	
鑑賞	[3]	美的・実用的な価値についての理解（装飾的な美しさ，機能的な美しさ）				42.1	
	[4]	美術鑑賞の基礎的な知識・理解			イ	作者の表現態度	84.4
					ロ	描画の種類	74.6
	実技	[1]	いすに腰をかけている人物を素材として物の描写力をみる				51.6

昭和 33 年度

分野	問題 番号	問 題 の ね ら い			正 答 率	
描画	〔1〕	イ	描画における絵画制作の基本的態度		45.7	
工作		ロ	版画制作中の彫刻刀の取扱い（姿勢と使用法）の理解		55.3	
色彩	〔2〕	配色における対比についての理解（明度対比）			15.8	
鑑賞	〔3〕	美術鑑賞の基礎的な知識・理解 （感覚的なもの、自然と造形）		イ	動的な美しさの要素	68.8
				ロ	静的な美しさの要素	35.0
実技	〔1〕	円すいの展開図の読み方や、見取図のかき方についての技能をみる。			24.7	
	〔2〕	マッチ箱の中箱が半分引き出された形のものを素材として描写力をみる			49.6	

昭和 34 年度

分野	問題番号	問 題 の ね ら い		正 答 率
描画	[1]	描画における立体感の表現（立体感の増減、面の動き）についての理解		63.9
工作	[2]	イ	木材の構造、特に木目の名称とそのあらわれ方についての理解	15.0
色彩		ロ	色彩と感情についての理解および生活に生かす態度	40.5
鑑賞	[3]	イ	構成要素	66.6
		ロ	表現方法	88.0
実技	[1]	箱形（筆立）の展開図の読み方や見取図のかき方の技能をみる		28.0
	[2]	電球を素材として物の描写力をみる		43.2

分野別問題数および正答率

分野 年度	描 画 (デザイン 配置配合)	色 彩	図 案 製図 法 図	工 作	鑑 賞	実 技	問題合計 一般実技
30	[1] 37.5	[3] 27.4		[2] 15.9	[4] イ 82.5 ロ 13.4 ハ 40.6 ニノ 1 14.5 ニノ 2 17.0	[1] 51.8	4 1
31		[2] ロ 84.8	[2] イ 51.4	[1] 37.1	[3] イ 8.4 ロ 5.9 [4] 12.6	[1] 50.2	5 1
32	[1] 55.7			[2] イ 19.1 ロ 71.9	[3] 42.1 [4] イ 84.4 ロ 74.6	[1] 51.8	4 1
33	[1] イ 45.7	[2] 15.8		[1] ロ 55.3	[3] イ 63.8 ロ 35.0	[1] 24.7 [2] 49.6	4 2
34	[1] 63.9	[2] ロ 40.5		[2] イ 15.0	[3] イ 66.6 ロ 88.0	[1] 28.0 [2] 43.2	4 2
問題 合計	3	2	4	—	5	7	7 28

(注) (1) 問題は、単に一つの分野の知識・理解の程度をみようとするものではなくあわせて、他の分野の基礎的な知識・理解をもみられるようなねらいで構成されている。したがって、問題を分野別に分類して図表化することは、必ずしも妥当ではない。しかし、問題の中心的なねらいからみて、一応分野別に分類整理をしたのが上の表である。

(2) 図法、製図の分野に関する問題は出題されていないが、これは実技においても、それらの知識・理解の程度は評価できるであろうし、また、職業・家庭科との重複をさける意味において調整して出題したものである。

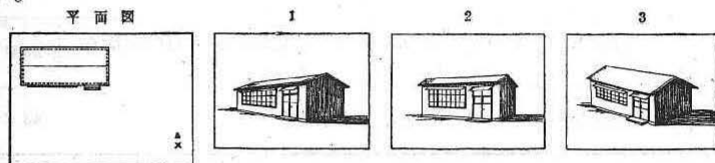
学力検査問題と学習指導

I 描 画

昭和 32 年度〔1〕

正答率 55.7%

ある家を、それと同じ平地の一地点から、立った姿勢で写生した。下の平面図は、その家と写生地点Aを示したものである。写生した位置・目の高さから考えてどれがよいと思うか。右の1・2・3のうちから一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。



問 題 の ね ら い

二消点透視図の理解を見ようとする問題である。

透視図は、肉眼で見たままに描く図法で、遠近感による実物の実感が、そのままに表わされるので、絵画作品はもちろん、日用品・建築等の見取図として広く活用されている。したがって、図工教育においては、絵画の制作や鑑賞、工作作品の製作、表示等と関連して指導することが必要である。

ここでは、生徒が学習経験を通して、透視図法の意味、具体的な作品による図法の見方、理解の程度を知ろうというのである。

なお、二消点透視の場合が示されているが、もちろん、一消点の場合も理解されていなければ、真の力とはならないであろう。

生 徒 の 困 難 点

1 芸術作品と遠近法……正確な透視図法によって描くということは、個性的表現を尊重する美術教育の面からいえば、矛盾することにもなり、したがって教師としては、これを軽視する傾向がある。そういう指導の不足から、生徒

の理解不足ということも考えられる。

2 職業・家庭科との関係……図法教材は、職業・家庭科と、図工科の間に重複しており、そのために、透視法のような、中間的な性格をもつものの指導が不徹底になってはいないであろうか。

指導上の留意点

- 1 目の高さと形の変化……物をみる場合、眼の位置によって、形は変化する。

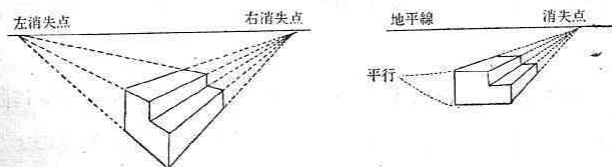
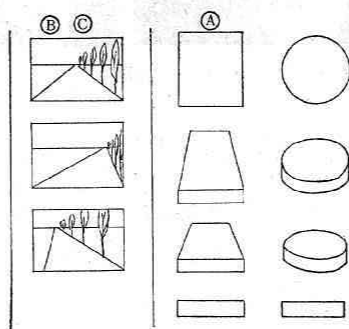
① 上・下の方向

② 左・右の方向

③ 近くから遠くへ

- 2 消失点が一つの透視図

- 3 消失点が二つの透視図



以上は、単に図法として知的に指導するより、古今の名画により、または廊下、並木道等を観察させるなどして、経験的に、興味的に扱い、その後に、正確な図法の原理について指導するのがよい。

参考名画……ダヴィンチ（最後の晩餐）

ホッペマ（ミッデルハルニスの街路）

つぎのイ、ロの写真は、デッサンと版画の製作中の一場面である。姿勢または工具のとりあつかいからみて、よいと思うものの番号を、それぞれ○でかこみ、そのおもな理由を書きなさい。

1

2

(理由)

イ.



ロ. 昭和33年度〔1〕ロ 工作 参照

問題のねらい

1 デッサンの正しい姿勢……絵を描く場合、いつも全体の統一を考えながら描くことが大切である。そのためには、あまり画面に顔を近づけることは、見方が部分的になっていけない。

また、線のはこびにしても、腕をのばしてかけば、大胆に伸び伸びとかけることになる。

2 正しい姿勢は、正しい理解から……以上のことは、デッサンに限らず、すべて絵画制作に共通する原則でもある。したがって、この写真のような、画架を使って、大型画用紙に木炭で描くということをやっていない生徒でも、正しい理解をもっていれば容易に解答できる問題である。

そのような理解をみようというのがこの問題のねらいである。

生徒の困難点

デッサンになれていない生徒……この写真にみるようなデッサンになれていない生徒は、小さい画用紙に向って、比較的、画面に顔を近づけて描く場合も考えられる。そういう生徒にとっては、右の写真は、異常に離れすぎていると思うかも知れない。

指導上の留意点

1 デッサンの意義について……創造的な表現を重く考えれば、せっこうデッサンは、何か型にはまった古くさい仕事のように考えられやすいが、しかし色彩を使つての写生にしても、たんに外界の色相の変化だけに気をとられて、統一のない混乱した絵ができる場合がしばしばみられるのは、やはり、デッサンの不足を物語り、それは、やがて絵の行きづまりともなる。

したがって、あらゆる色相からなる風景を、単一の、一色の濃淡（明暗）に翻訳してみる勉強により、描く基礎を作っていくことが重要となる。

2 セっこうデッサン……このように、形体的な秩序と取りくむためには、せっこうは白一色であり、質も一ようであるので、デッサンの基礎の勉強に適している。これができてはじめて、色彩のある、また、質の複雑なものの表現もできるのである。

3 制作について……

(1) 対象の印象をつかむこと……目や口が、どうなっているかなどといった、細かいことではなく、まず、描こうとする物全体が、どんな感じを与えるかを味わうことが大切である。

(2) 全体との関係で部分をみる……こみ入った形のもの、部分的に見がちである。それでは、ついにまとまることはない。常に全体の形相をつかみながら、部分をみるという仕事をくり返すことによって、最初の印象は、次第に強く、深く、作品に表われていくのである。

(3) 線、面、立体の方向、比例、バランスなどの相互関係をとらえる。

(4) 明、暗表現について……せっこう像をみると、微妙な明暗の階調がわかるが、これも、最初から気をとられると、調子がうるさくなり、全体としての立体感も表現できない。

まず、明暗の調子を、A、B、Cの3段階にまとめ、大きな調子をつけ、次に各段階をそれぞれ、さらに3段階に分けて、細部にうつるのがよい。

(5) 遠近の表現について……立体感を表わすには、遠近の表現も必要である。たとえば、前の髪と、後の髪の距離はちがうから、調子の変化によって描き表わすというふうにする。

以上、デッサンに対する、正しい理解のもとに（つまり創造的表現も、デッサンの基礎が必要）指導されなければならない。

下の写真は、胸像に光をあてる方向をいろいろかえて、うつしたものである。このうち、もっとも立体感のだせなかったものを一つ選んで、その符号を○でかきこみなさい。また、それは、どの方向から光をあてたものか。右の□の中から適当なものを一つ選んで、その番号を()の中に書きなさい。



A ()



B ()



C ()



D ()



E ()

- | |
|-------|
| 1. 上 |
| 2. 横 |
| 3. 斜上 |
| 4. 前 |
| 5. 後 |

問題のねらい

せっこうデッサンはもちろん、一般の描画において、対象の立体感を表わそうとすれば、光の方向によって、対象の明暗、陰影に微妙な変化を生じ、それにつれて、物体の立体感もまた、増減していることを経験している。

それを正しく観察し、感じとることは、描画する際の大切な態度であり、心構えでもある。本問題は、そのような見方、感じ方、理解・態度等について見ようとしたものである。

生徒の困難点

常識で判断する生徒……正面光線や、背面光線は、立体感がでない、というような常識で判断し易い生徒は、このような写真で、具体的なものを見せられた場合、誤ることがあるだろう。あくまでも、示された写真を誠実に観察し、感じたままを素直に表現することが大切である。

指導上の留意点

1 せっこうデッサンとして

明暗や、立体感の観察や、表現は、せっこうデッサンの際に、もっともよく指導できる。その際、たんに片側光線にすると、立体感が出るというような、概念的な指導に終らぬよう、各方向から光をあてて、その立体感の変化、明暗

の変化を、生徒が、自分の目で発見し理解するようにすることが必要である。

特に、暗室装置のある図画室などではそれが最も効果的にできるであろう。

2 反射光線に注意

一方から光線が来た場合でも、壁、床、天井などに反射して、その反射光線のために、暗部にも微妙な明暗の段階が生じ、それが物の立体感に影響を与えるものである。

3 鑑賞指導として

名画によって、光の方向や、明暗表現の美しさ、立体感を、鑑賞させることは、鑑賞指導の意味からはもちろん、生徒の理解、興味、関心を深める上に、大いに役立つものである。

4 せっこうデッサンに代るものとして

せっこうデッサンの代りに、画用紙を折ったり、曲げたりして机上におき、それに光を各方向からあてて、デッサンさせるのもよい方法であろう。

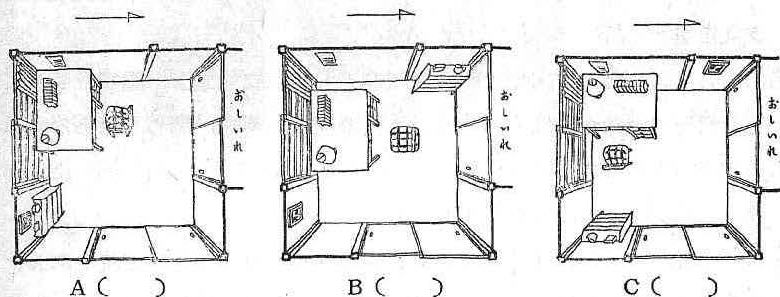
その他、白ぼく入れの箱、無地の壺、茶わん等、生徒の身のまわりのものでくふうすればよい。

Ⅱ 図案（デザイン配置配合）・色彩

昭和30年度〔1〕

正答率 37.5%

下の図は、^へ_パ 部屋の^パ中の物の配置図である。A、B、Cのうち、勉強室兼寝室として、もっともよい配置だと思うものから順に、1、2、3の番号をの（ ）中に書きなさい。



問題のねらい

美術的な作品をつくるとか、実用的なものをデザインすることは、図工科の大切な内容ではあるが、われわれの日常生活においては、すでに、でき上っている作品を、いろいろに配置配合して、生活を美しく、かつ、むだのない合理的なものに設計する場面も多い。

たとえば、机上のスタンド、インキびん、筆立、本立等の配置、台所用品の配置等、単に美しさだけで考えるわけにはいかない。

便利で美しい、配置配合する態度、能力は、美と生活の関連という意味から、図工科でも指導すべき内容となっている。

この問題は、以上の観点から、勉強部屋を例にとりて、配置配合の態度能力をみようとしたものであって、主なる観点は、

- 1 部屋を広く使うための机の位置
- 2 机上を明るくするための、本立やスタンドの位置
- 3 本棚の本が、明るく見よいこと
- 4 壁面の利用が一方に偏しないで、美観を保つこと

等であろう。そういう総合的な考えから判断することが望まれるわけである。

生徒の困難点

この種の問題は、各生徒の生活態度や、生活環境とも深い関係があるため、三枚の図の微妙なちがいに気づくことは、困難があるかも知れない。

指導上の留意点

- 1 配置配合の意味をよく理解させること。(上記参照)
- 2 実際の指導においては、各グループに分けて、各一つずつの研究をまとめ、発表させ、お互いにそれを批判反省させるなども一つの方法であろう。

(参考例) ・教室の掲示 ・学級新聞の編集 ・校庭の設計 ・卒業記念アルバム各ページの構成 ・勉強部屋 ・能率的な台所設計 ・子供公園

- 3 発表の方法……以上の研究は、紙上に設計、考案図として描かせたり、工作と一しょにして、立体的に模型製作させるなど、いろいろな方法が考えられる。

特に、台所や、勉強机の机上配置などは、作業のしやすいよう、動線の距離測定など、数的に調査させてみるのも効果的である。

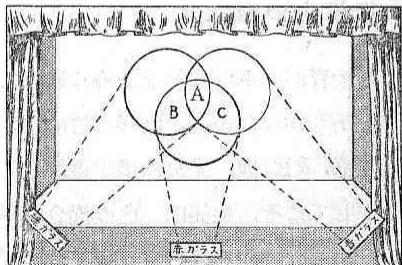
昭和30年度〔3〕

正答率 27.4%

学芸会で舞台効果をあげるために、白い背景に向けて、右の図のように三方から色光をあてた。光線が交わってあつたAとBの部分は、それぞれどんな色になるか。もし絵具で、この図のように青、赤、緑を混合するとしたら、AとCの部分はそれぞれどんな色になるか。(どの色も同じ量ずつの純色を混合する)

下の表の中に、色名を書きなさい。

		A	B	C
イ	色光の交わった場合			
ロ	絵具を混合した場合			



問題のねらい

絵画制作における、絵の具の混色は、生徒が日常経験していることであり、

また、芸能会の照明や、商店の照明等によって、色光混合に対する関心も、要求も高まってきた。

また、印象派の点描による視覚混合も、今は新聞雑誌の写真製版、美しい玩具の風車や、コマの廻転、衣服の混織等によって身近なものになっている。

したがって、これらの混色の原理を理解したり、これを制作に利用する力をもつことは、いよいよ必要になってきたようだ。

これら、色彩の混合について、生徒の理解が、いかに身についたものとなっているかをみる問題である。

生徒の困難点

色の混合については、減算混合、中間混合、加算混合の三つあることはだいたい知っていると思う。

しかし、この中で、加算混合は、教師が最も指導に手ぬかりを生ずるものである。

すなわち、色光の混合は、室を暗室にするとか、懐中電灯を数個用意するとか、施設、設備等の点で、実験が省略されているのが現状である。

したがって、簡単な説明で終ってきたとすれば、このような問題を前にして生徒は、さぞ当惑したことだろう。

正答率のわるかったのは当然であろう。

指導上の留意点

色彩教育が、単に知的な指導に終っては何の効果もない。

困難かも知れないが、色彩指導には、混色廻転板とか、色光混合実験のための、暗幕、幻灯機、または懐中電灯などの準備が特に必要である。

こうしてこそ、生徒は、色の混合の不思議さと、美しさに、強い関心と感動をいただくことであろう。

色光混合に対する、えのぐの混合、あるいは、回転板による視覚の混合に関しても同様、しっかりした指導ができていれば、色光混合の理解も、一そうはっきりするわけである。

つぎの文の()の中から、適当なものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

イ. 道路標識に、黄色と黒色の配色が多く用いられているのは、主として(1. 明度 2. 色相 3. 彩度)の対比の効果を利用したものである。

ロ. 筆立を設計するときには、製品の(1. 美観 2. 安価 3. 単純化 4. 安定性)をまず第一に考えなければならない。

(イ) 問題のねらい

色の明視は、従来、絵画制作の際にも指導されてきたが、近年、デザインの隆盛とともに、重視されてきた。すなわち、看板、ポスター、表紙、標識、乗物などの配色に利用され、生産性の向上に、危険防止に、その威力を発揮しつつある。

したがって、明視の原理のよき理解者、よき活用者たることが、これからの社会人に要求されるのではあるまいか。

そういう意味から、明視の原理の理解や、関心度をみようとする問題であり、つぎのことが理解されていなければならない。

- 1 地色と色との関係による明視度の高低
- 2 三要素関係からみて、最も効果的な要素
- 3 明視度と注目性の関係
- 4 対照的な色と注目性の関係

生徒の困難点

黄色と黒色の配色は、考えようによって、彩度対比であるかも知れない。

したがって、緊張した場面で、どの一つをとるかという時、一瞬迷うのもやむを得ない。このようなとき、やはりすなおに考えて、最も普通の常識的な判断によって明度対比をとるべきであろう。

指導上の留意点

ある色が、遠くまではっきり見えるには、明度差が最も大切な条件になると

いうことを、はっきり指導する必要がある。

同時に、色相差、彩度差の影響することも指導すべきであるが、そのために、三つの条件が混乱しないように注意が肝要である。

以上はあくまで実験的に、色紙などで指導すれば効果があるのであって、単なる知識の注入では真の理解とはならない。

いろいろの、二色配合を出し、その明視度の高さを比較判断させるような問題は、この種のものとして指導しておかなければならない。

以上、明視のみを取り出して指導する場合であるが、一そう具体的にするには、それを作品の制作へ発展させることがよいであろう。

(ポスター、標識等上記問題のねらい参照)

(ロ) 問題のねらい

デザインを図案と考え、図案をもようと考えていた従来の観念をやめて、用を基本とした美を、デザインとする本質的な考え方を求めた問題である。

したがって、直接的には筆立の設計の心構えをみようとする問題であるが、その基本となるものは

- 1 日常使用するものについて、用と美の関係についての理解
- 2 日用品の良否を判断する能力
- 3 日用品を選択する能力

である。

生徒の困難点

筆立の設計であるから、安定性という答が出てくるのはごく自然であって、この問題で生徒は格別困難を感じることにはなさそうだ。

しかし、デザインをもようというふうに考えている生徒があったとしたら、美観、という答を出すであろう。

指導上の留意点

筆立にかぎらず、役に立つものを作ろうとする場合、まず、その目的を考え、それに適した形が考えられるであろう。

したがって、ふだんの指導において、そういう基本的なところから生徒のくふう創造力を伸ばすようにしていれば、このような問題はまことに平凡なものといえる。

しかし、施設、設備、経費等のことで、セット式の組立工作をしたり、同一材料、同一設計で、一斉指導が行なわれているとしたら、あるいは、デザインとは「もようつけ」と心得る生徒がでることにもなる。

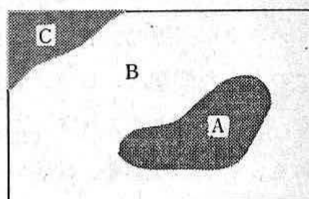
物を作るということは、大切であるが、それが単なる技術に終ることなく、デザインのはっきりした理論の上にたって、はじめて生きてくるのである。

昭和 33 年度〔2〕

正答率 15.8%

右の図のAの部分は、だいたい色で、Cの部分は灰色である。この場合、Aの部分をもっと明るく見せるには、Bの部分をつどんな色にしたらよいか。

また、もっとも暗く見せるには、どんな色にしたらよいか。下の□のうちからそれぞれ一つずつ選んで、その番号を答の()の中へ書きなさい。



明るく見せるには ()
 暗く見せるには ()

1. あお 2. きだいたい 3. あおみどり
 4. あおむらさき 5. きみどり 6. き

問題のねらい

色は単独に存在せず、常にまわりの色との関係において存在し、またその際まわりの色の影響をうけて、明度、色相、彩度にいろいろの変化を生ずる。そのような色のふしぎさ、すなわち、対比現象が、われわれの生活に大きな関係がある。そういう重要なことに対する生徒の理解や感覚をみるのが、この問題のねらいであるが、特にここでは、明度対比をとりあげ、つぎのことについての理解をみようとしたものである。

- 1 明度対比によって、ある色が明かるくみえたり、暗くみえたりする。
- 2 純色の各色相の明度は、それぞれどのようにちがうか。

生徒の困難点

これは、明度対比の問題であるから、各色相名に、明度が記入してあれば、親切であったと思われるが、またそれでは、あまりにも解答が簡単に出てしまう。したがって、各純色の明度の大体の指導は、なされているものとみて、それを記入しなかったのである。

しかし、このうち、青緑、青紫、青の三色の明度差は微妙であって、現実の色を見なければ判断しにくい点もあったことだろう。

指導上の留意点

上記のように、この問題は、やや高度であったかも知れない。理想をいえば、テストに実際の色紙なり、色刷りなどで示されることが望ましい。

このような問題は、日常、われわれの生活に数多くあることで、ユニフォームに、部のマークを入れるとか、くず箱にペンキで級名を入れるとか、いろいろある。そういう場合、現実になそれを明かるくみせようとする必要がある。それらの基本になる判断力は、色彩指導によって養われるのである。

その意味から、実際指導にあたっては、つぎの点を重視すべきである。

- 1 色の対比、特に明度対比について、いろいろの色相による実験的な指導。
- 2 12色相の指導の際、その明度についても、明度順に並べてみるようなことを徹底的にやっておく必要がある。

昭和34年度〔2〕口

正答率 40.5%

つぎの間に答えなさい。

イ. 昭和34年度〔2〕イ 工作参照

- ロ. 学校の保健室の壁を塗りかえることになった。どんな色の壁にしたらよいか。下の□の中から、もっとも適当と思う色を一つ選んで、その番号を○でかきなさい。また、その色を選んだ理由をかんたんに書きなさい。

1. 淡緑	2. 黄	3. 濃青	4. 紫	5. 赤	6. 淡紅
-------	------	-------	------	------	-------

理由

問題のねらい

色彩のはたらき（機能）についての理解、およびそれを生活に生かす態度、技能をみようとしたものである。

色彩は、生活に密接しており、ことに、われわれの嗜好、感情に直接ひびくもので、色彩による生活環境の調整は、保健衛生、作業能率、安全、快美感など、われわれの精神や肉体に重要な役割を果すものと考えられる。

商工業のデザインにしても、一般的、普遍的な色彩嗜好や、感情効果をねらわないと、需要者をひきつけることができず、ひいては産業発達に大影響をきたす。この意味で、生徒に、つぎのような理解、態度、技能が要求される。

- 1 色のはたらき（機能）が、われわれの生活に、どのように応用されているかの理解、および生活に、色彩を合理的に用いる技能、態度。
- 2 色彩調節の意義や、必要性の理解、および環境を改善しようとする態度。これらが生徒の身について、はじめて、本問題も解決されることになるのである。

生徒の困難点

だいたい、緑系統は、人間の心に和やかな、安寧な感じを与えるという程度のこと、指導されているし、生徒もいろいろな経験を通して、深く理解しているだろう。したがってこの問題は、基本的には困難な点はない。

しかし、考えようによっては、淡紅もまた保健室にいいのではないかと考えるだろう。淡紅は、白に近い場合、暖い親しみの気持をもって、病人を迎えてくれるだろうから、その意味で多少迷うことが予想される。

指導上の留意点

緑は、安寧の色で、保健室のかべによいという常識的な、概念的指導であってはならない。

しかし、他の色も含めて、多くの色について、それぞれ、どんな気持を人に与えるかを、感覚にうたえ、個々の感情にきいて、実験的に指導し、結果として、淡緑は、保健室によいというのならば、その指導は正しいし、そこで現

われた、生徒の色彩教養は、テストに対しても、それに即した判断ができるに
ちがいないのである。

また、淡紅も、その明度や彩度によっては、保健室むきだともいえるわけだ
から、それら、幅広い指導が望ましい。

そのためには、指導の際、つぎの点に留意する。

- 1 色のはたらきについて研究し、生活に应用されている現状について調査
させる。

たとえば、適当な建築や、交通機関等について、実際に調査見学など。

- 2 じゅうぶんな、資料をあつめる。

学校、家庭、工場、会社、病院等の色彩調節資料。

交通機関、交通標識、信号等の配色例。

- 3 できるだけ、色彩調節を実際に計画し、作業を通して、具体的に感得さ
せる。

たとえば、教室や、勉強室等の身近な環境について、色彩調節の計画を
立て、設計図や模型を作らせる。

Ⅲ 鑑 賞

昭和30年度〔4〕

下の二つの素描の作品をくらべると、表現態度や、用具、描き方などに、たいへんちがった特徴がみられる。作品をよくみて、つぎの間に答えなさい。

(A)



第五郎の像 渡辺華山

(B)



男の子 セザンヌ

正答率

イ. Aの作品の線描は、何を用いて描いたものか。

82.5%

答

ロ. Aの作品は、線のつかい方にBとちがった特徴がみられるが、そのおもな特徴を一つだけ書きなさい。

13.4%

答

ハ. Bの作品は、対象のとらえ方にAとちがった特徴がみられるが、そのおもな特徴を一つだけ書きなさい。

40.6%

答

ニ. 渡辺華山は江戸後期に、セザンヌは19世紀から20世紀にかけて、それぞれ活躍した人であるが、美術の上でどのような仕事をしたか。簡単に書きなさい。

1 華 山

14.5%

2 セザンヌ

17.0%

問 題 の ね ら い

日本画、西洋画の二作品を比較して、表現用具、表現の特長、美術史上の位置などを求めた問題ではあるが、これらを通しての、一貫したねらいは、生徒が作品に接して、いかによい鑑賞態度をもっているかという点である。

まず

- 1 作品からうける感動……これが中心となって、そこからやがて、
- 2 構図や、技法上のおもしろさ……におよび、さらに、
- 3 作者の美術史上の位置、特色、人間性への探求、

へと発展していくのである。したがって、たんに、知的な理解を先にして、美術史的な考えで、作品にのぞむことをねらっているのではなく、作品を味わい、感動することが深ければ、当然、理解面へ発展するものとして考えていきたい。

生徒の困難点

1 鑑賞指導の困難性……現実には、実物鑑賞は不可能であり、といって、多人数で鑑賞できるような大きな複製写真も入手困難、いきおい、幻灯映写が望ましいことになるが、暗室施設がない。

したがって、中学校における鑑賞指導は、大きな壁にぶつかっているというのが実情である。そのため、この問題のように、作品の線のおもしろ味とか、対象のとらえ方の特色など、細部の分析的な鑑賞は、生徒にとって、さぞ困難を感じたことだろう。正答率もだいぶんわかったようだ。この意味で、今後鑑賞指導が、よく行なわれるように、施設の整備や、指導方法に、くふうをこらしていく必要がある。

2 鑑賞における知的理解面……作家の美術史的な位置や業績は、作品鑑賞というしっかりした根をもって、そこから発展して理解されなければならないのに、上記の理由で、鑑賞が、じゅうぶん行なわれていないならば、身についた理解とはならず、解答に困難することにもなる。

正答率のわるいのも、そのためではなかろうか。

指導上の留意点

1 作品全体の感じや、良さを観させるだけでなく、何によって表現されて、その効果がでているかということも、あわせて考えさせる。

2 線の特徴は、表現する用具、材料や画家の個性によって異なる。したがって鑑賞指導は、単に、全体の感じに止まらず、用具、材料、技法、構図等、

分析的な見方にもおよぶ必要がある。

3 作品をみさせて、どういう観点で対象をとらえたかを考えさせるには、生徒の自主的な鑑賞活動がなされなければならない。また、鑑賞の回数や、量でなく、表現活動において、創造性をもたせていくことが大切であり、しかも多角的にやることがよいと思う。

4 鑑賞指導の場合、美術史として、どの程度の深さや広さ迄やればよいか
が問題となるが、一応、示された基準位はやっておきたい。

5 鑑賞指導の際、中学校としてとりあげるべき作家名、作品名はどの程度がよいか。これについて、はっきりした基準を示すことはむづかしいが、昭和26年度改訂版の学習指導要領（47ページ）に、図画工作科鑑賞資料として、あげられているものが、一応のめやすと考えられるので、つぎに紹介しておく。

図画工作科鑑賞資料

絵 画 編 第 1 集

図番	作 品	内 容	時 代	国 別	所 在
1	法隆寺壁画 阿弥陀浄土図	部 分	奈良前期	日 本	法 隆 寺
2	伝隆能筆 原氏物語絵巻	同	平 安	同	徳川黎明会
3	伝鳥羽僧正筆 鳥 獸 戯 画	同	同	同	高 山 寺
4	伝藤原隆信筆 源 頼 朝 像	全 図	鎌 倉	同	神 護 寺
5	雪 舟 筆 夏 冬 山 水 図	同	室 町	同	国立博物館
6	尾形光琳筆 燕 子 花 図	一 隻	江 戸	同	根津美術館
7	渡辺華山筆 鷹 見 泉 石 像	全 図	同	同	国立博物館
8	狩野芳崖筆 悲 母 観 音 図	同	明 治	同	東京芸術大学
9	菱田春草筆 落 葉	一 隻	同	同	
10	高田由一筆 鮭 図	全 図	同	同	東京芸術大学

絵 画 編 第 2 集

図番	作 品	内 容	時 代	国 別	所 在
1	作者不詳 信貴山縁起絵巻	部 分	平 安	日 本	朝渡孫子寺
2	同 阿弥陀聖衆来迎図	全 図	同	同	大門院他十八箇院

3	同 那 智 滝 図	全 図	鎌 倉	日 本	根津美術館
4	伝長谷川等伯筆 桜 楓 図	屏風八面	桃 山	同	智 積 院
5	宗 達 筆 風 神 雷 神 図	二曲屏風	江 戸	同	建 仁 寺
6	広 重 筆 東海道五十三次	部 分	同	同	国立博物館
7	池 大雅筆 山 水 人 物 図	襖絵八面	同	同	遍 照 光 院
8	円山応挙筆 雪 松 図	一 隻	同	同	
9	浅井 忠筆 収 穫 図	全 図	明 治	同	東京芸術大学
10	黒田清輝筆 てっぼうゆり	同	同	同	同

絵 画 編 第 3 集

図番	作 品	内 容	時 代	国 別	所 在
1	伝顧愷之筆 女子 箴 画 卷	部 分	六 朝	中 国	大英博物館
2	正 倉 院 { 搦面・狩獵図・騎 象鼓楽図	同	唐 代	同	正 倉 院
3	梁 楷 筆 雪 景 山 水 図	全 図	宋 代	同	国立博物館
4	牧 谿 筆 観 音 猿 鶴 図	同	同	同	大 徳 寺
5	董其昌筆 山 水 図	二 面	明 代	中 国	国立博物館
6	ポッチェ { マニフィカードの ルリ筆 } マドンナ	全 図	15 世紀	イタリヤ	フローレンス
7	レオナルド { マドンナ・リザ 二ヴァインチ筆 } モンナリーザ	同	16 世紀	同	パ リ
8	ドラクロア筆 聖 母 の 教 訓	同	19 世紀	フランス	国立博物館
9	セザンヌ筆 { サンヴィクトワール 山	同	同	同	
10	ルノアール筆 小 女	同	20 世紀	同	

彫 刻 編

図番	作 品	内 容	時 代	国 別	所 在
1	法隆寺夢殿 観 音 菩 薩 像	全 像	飛 鳥	日 本	法隆寺夢殿
2	中 宮 寺 弥 勒 菩 薩 像	同	同	同	中 宮 寺
3	薬 師 寺 薬 師 三 尊 像	同	奈 良	同	薬 師 寺
4	東大寺戒壇院 持 国 天 像	同	同	同	東 大 寺

5	興福寺十大弟子像	一 体	奈 良	日 本	興福寺
6	観心寺如意輪観音像	全 像	平 安	同	観心寺
7	東大寺開山堂 良弁僧正像	同	同	同	東大寺
8	東大寺金剛力士像	一 体	鎌 倉	同	同
9	興福寺天燈鬼・竜燈鬼	同	同	同	興福寺
10	中国大同の石仏	同	六 朝	中 国	雲 岡
11	エジプト書記の像	同	第五王朝	エジプト	ルーブル博物館
12	ミロ島ミロのヴィナス	同	紀元前第2世紀	ギリシア	同
13	パルテノン神 <small>【パルテノンの彫刻二女神像】</small>	部 分	紀元前第5世紀	同	英国博物館
14	ギリシア <small>【スピナリオ(とけをぬく少年)】</small>	一 体	同	同	ローマ
15	ミケランジェロ モーゼ像	同	第16世紀	イタリア	同

建 築 編

図番	作 品	内 容	時 代	国 別	所 在
1	法隆寺金堂	全 景	飛 鳥	日 本	奈 良 県
2	薬師寺東塔	同	奈 良	同	同
3	唐招提寺金堂	同	同	同	同
4	法隆寺夢殿	同	同	同	同
5	正 倉 院	同	同	同	同
6	平等院鳳凰堂	同	平 安	同	京 都 府
7	東大寺南大門	同	鎌 倉	同	奈 良 県
8	鹿苑寺金閣	同	室 町	同	京 都 府
9	姫 路 城	同	桃 山	同	兵 庫 県
10	妙喜庵待庵	同	同	同	京 都 府
11	桂離宮松琴亭	内 外 部	江 戸	同	同
12	京都御所清涼殿	全 景	同	同	同
13	赤 坂 離 宮	同	明 治	同	東 京 都
14	パルテノン神殿	同	紀元前第5世紀	ギリシア	アテネ
15	セント＝ソフィア寺院	同	紀元前第6世紀	トルコ	コンスタンティノープル

16	サン＝ピエトロ寺院	正面全景	紀元 第17世紀	イタリア	ローマ
17	ベルサイユ宮殿	全部 景分	同	フランス	ベルサイユ
18	タージ＝マハール	全 景	同	インド	アグラの東 部
19	天壇祈年殿	同	紀元 第15世紀	中国	北京

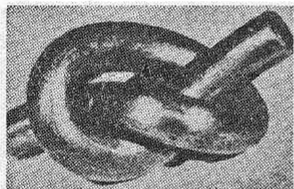
(注) ここにあげたものだけでは不じゅうぶんであるから、適宜補充してもらいたい。

昭和31年度〔3〕

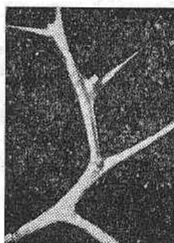
正答率 イ 84% ロ 5.9%

つぎの写真は、自然や造形作品をとりあげたもので、それぞれちがった美しさがみられる。このうちで、主として、「リズムの美しさ」をあらわしているものはどれか。また、主として、「比例の美しさ」をあらわしているものはどれか。それぞれ二つずつ選んで、その番号を、答の()中に書きなさい。

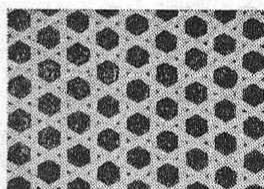
1



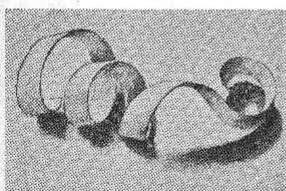
2



3



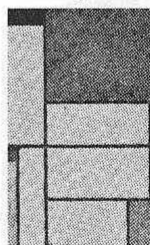
4



5



6



答 イ. リズムの美しさ——() ()

ロ. 比例の美しさ——() ()

問題のねらい

表現力とともに、鑑賞力も重要である。しかも、美しいものを美しいと感ずる感覚的、直観的なものだけでなく、そこにひそむ、美の原則を分析し、知的整理を試み、それがやがて、創造力へも大きく影響することが、その目標であらう。

以上の見地から、美の鑑賞力や、美の原理が、どれだけ生徒の力になっているかをみようとした問題である。

生徒の困難点

第一の困難点と思われることは、美というものは、リズムなり比例なり、それ一つだけ含まれているものでなく、いろいろな原理が複合しているものであるから、一つだけとり出して答えるという点に、困難さがあるだろう。

第二の困難点は、生徒は、このような問題になれていなかったのではないか、このようなテストは、實際上、中学校では従来行なわれていなかったようである。鑑賞のテストは、むづかしいものとして敬遠してきたのが実情であった。

指導上の留意点

上にあげた、第一、第二の困難点も、要するに、指導者の手ぬかりをつかれた結果であって、この年以來、各中学校でも鑑賞指導と、そのテスト方法に、くふうをこらすようになってきたと思う。

まず、その指導のためには、芸術作品はもとより、自然物、建築物、日用品等、あらゆるものに、美的関心をそそぎ、その写真や、複製、できたら実物の展示などで、そこにいかなる美の原理がひそんでいるかを、味わせることである。

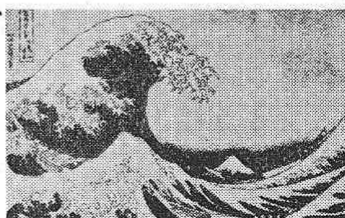
しかし、それが無味乾燥の指導にならぬよう、たとえば、幻灯にして、いっそう、その美しさがはつきりするようにくふうするなど、興味関心をもたせることが大切である。

美しいものには、いろいろの美の原則が、複合しているけれども、指導に当っては、特にある一つの原則がはっきりでているような、模式的な作品を用意し、重点的な鑑賞指導を行なうことが効果的である。

昭和31年度〔4〕

正答率 126%

右の写真は、江戸時代の版画家、葛飾北斎 かつしかはくさい の作品「波裏の富士」である。この作品にみられる構図の特徴は、つぎのうちのどれにあたるか。あてはまるものを一つ選んで、その番号を○でかきなさい。



1. 左右対称 (シンメトリー)
2. 対比 (コントラスト)
3. 遠近法
4. 不均衡 (アンバランス)

問題のねらい

美の鑑賞は、直観的に、その生命にふれることにあると思うが、また、時には、それを表現の形式面から、原理的なものを深めることもまた、鑑賞の一つの楽しみであり、それが理解されることによって、生徒の表現力の伸展に役立つものでもある。

本問題は、構図の面から、このような理解力をみようとしたものである。

生徒の困難点

作品に表わされた、構成美の要素を見出すことは、その要素にどんなものがあるか、また、この作品はどこがよいか、という要素と、特徴の関連をみなければならぬ。

生徒は、コントラストや、シンメトリーという、言葉としては知っていても、それを特定の絵にあてはめて、応用することは、多少困難を感じるかも知れない。

この絵は、コントラストと、遠近法の二つの要素をもっているように見える。それを、一つと限定されると迷うことになる。

指導上の留意点

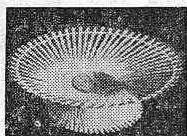
作品鑑賞のみでなく、自分の身のまわりのものの美しさに、どんなものがあるか。また、その美しい点はどこかを、常に味わわせるようにするとよい。

古今の名作のうち、特に構図上特色あるものについては、よく指導しておくことが大切である。

単に、名画によるだけでなく、日常の生徒の図案、写生の時などにも、美の原則、原理を応用するように心がけると、身についたものになると思う。

つぎの造形品のうちで、主として、 $a \cdot b$ にあたるものはどれか。それぞれ一つずつ選んで、その番号を()の中書きなさい。

1



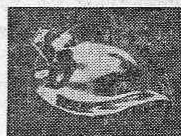
2



3



4



- a. リズム感のある装飾的な美しさの感じられるもの ()
 b. すっきりとした機能的な美しさの感じられるもの ()

問題のねらい

われわれが、日用品を選択する時、機能性を重視する場合と、装飾性を重視する場合とある。

いずれにしても、その選択の目的によくあったものを選び出す、感覚とか英知、それらを要求する問題である。

特に イ リズム感のある美とは ロ 機能的な美とは……が中心である。

生徒の困難点

美しさというものが、何か、飾られて生ずるものだと考えているのが、子供ではないだろうか。

したがって、鍋が、いかに機能的であったとしても、それが直ちに、美と結びつかないのであろう。また、それが、あまりにも見なれた平凡な形であり、たとえ、そこにわずかの変化が行なわれてきたとしても、気づかないのが普通である。ここに、この問題の困難さがある。

つぎに、(4)図の灰皿などが、いかにも形態や、材質感から、われわれに新しさを感じさせることも、問題の解決を困難にしている原因でもある。

リズム感という言葉も、美の原理の一つとして、一応知っていなければ困難を感じるだろう。

指導上の留意点

美とは、決して装飾することではない。という点を特に、日用器具類について指導すること。

水差し、コップ、スプーン、鍋など、身近にあって、最も、平凡と思われるもの

のなかにも、洗練された、合理的、機能的な美をもっていることに注意する。

どのように機能的であるかを、その形態、材質、構造、色彩などの上から、考えてみるように指導する。

装飾の必要性、装飾の限界等について、スプーンや鍋のように、目的にあった合理的な形態そのままが美であるとき、装飾はむしろない方がよいし、それだけでは、物たりないと感じたとき、おのずから、装飾が求められるだろう。ただし、その場合、あくまでも、機能性を害しない程度においてであろう。

婦人雑誌や、新聞の写真など、あるいは、新聞の中のハサミ広告、パンフレット類などに、日用品類の写真など多い。

心がけて集めると、(生徒にもよびかけて) 相当量になる。これを選択して、台紙に張るなり、袋に分類して入れるなりすれば、機能美とか、装飾とかの問題を考えるよい資料となる。

昭和 32 年度 [4]

正答率 イ 84.4% ロ 74.6%

右の絵をみて、つぎの間に答えなさい。

イ. この絵の作者は、どんなねらいで
かいたと思われるか。この絵の特徴
や受ける感じから考えて、つぎの 1
2, 3 のうちから、もっともよいと
思うものを一つ選んで、その番号を
○でかきなさい。

1. 自然の美しい風景を、そのまま
表わそうとした。

2. がっちりとした岩の組立てや海
のはげしい動きを、力強く表わそうとした。

3. 海の中に、点々とある岩や白い波の軽快な感じを、表わそうとした。

ロ. この絵の原画は、つぎのうちのどれにあたるか。あてはまるものを一つ選んで、その番号を○でかきなさい。

1. ^{すみ} 墨 絵 2. 版 画 3. 油 絵 4. 木炭画 5. はり絵



問題のねらい

イ 絵から受ける感じや特徴から、作者が対象をどんなねらいでとらえたか、その表現態度についてみようとする問題である。

ロ 作品をみて、描画の種類を考えさせる問題である。

生徒の困難点

イ 作品が、特徴ある表現であり、それに示された選択肢も、はっきりしたちがいが出ているので、大きな困難はなかったであろう。

ロ 色が表現されていないので、無彩色の、マチュールだけで判断しなければならない点に、多少の困難を感じたかも知れない。

指導上の留意点

1 細部の分析的な観方より、先ず全体の感じや、雰囲気を感じさせるような指導が必要であり、さらに、それを、創造性を伸ばす面と結びつけていくことが大切である。そこから、対象をどのようにとらえているか、あるいは、とらえたらよいか、ということが身についていく。

2 描画の、各々の表現の特徴について、学習の経験を通しては握させるなり、よく特徴の出ている作品を資料として理解させる。

3 鑑賞も創造作用である。

鑑賞は、制作と対象的に考えて、あたかも、単なる受容作用と考えてはならない。作品と、みる者との間における創造活動である。

ちょうど、制作が、自ら作り出すものであると同様に、鑑賞も、自ら目をもって見出すものである。したがって、鑑賞指導において、指導者の主観をおしつけたり、説明しすぎたりすることは、生徒の自主的な鑑賞力の妨げとなる。

自ら発見し、感動することが根本である。

そういう態度が作られてこそ、本問題のような場合の理解も容易にできるのである。

昭和 33 年度 [3]

正答率 イ 63.8% ロ 35.0%

下の自然物の写真のうちには、右の彫刻^{ちようこく}の写真と共通した美しさをもったものがある。つぎの間に答えなさい。

イ. Aに見られる美しさに、もっとも近いものはどれか。一つ選んでその番号を () の中に書きなさい。

ロ. Bに見られる美しさに、もっとも近いものはどれか。一つ選んでその番号を

() の中に書きなさい。

A ()



(ギリシヤ ミロン ^{はん}円盤投げ)

B ()



(^{りゆう}広隆寺 ^{みろくぼさつ}みろくぼさつ)



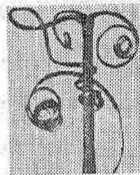
1. (貝がら)



2. (一輪さしの花)



3. (石がき)



4. (つ る)

問題のねらい

芸術作品の鑑賞だけでなく、広く自然や、日用品の美にも、目を向けさせたい。

自然の美は、ある一部を拡大したり、区切ってみたり、見る角度をかえてみたり、内部を切断してみたりすることによって、発見されることがある。いつも、常識的にみずに、新しい目で、自然を見ることが大切である。

美しいと思うとき、そこにどのような美の要素が含まれているかを考えてみる。

芸術作品は、自然から啓示をうけて作られることが多いので、その関係は密接である。したがって、芸術の美と、自然の美の中にひそむ、共通な美の要素を考えさせたい。

生徒の困難点

生徒は、細部に気をとられるものだから、全体の感じを見失わないようにしたい。

各々の作品の中には、いろいろの美の要素が複合されているから、迷いやすい。

共通する点は、材料とか、うわべの形などにもあるから、それに迷わされやすい。

指導上の留意点

1 鑑賞の資料

鑑賞が、たんに、芸術作品にとどまらず、自然物、日用品等におよぶようにする。

資料の収集には、実物、写真、模写、転写等いろいろな方法がある。

- 2 美は、どこにでもあることを理解させる。
- 3 みる位置、角度により、美の様相の異なることを理解させる。
- 4 美しさの種類が多くあることを理解させる。
- 5 造形の要素（形・色・量・材質）について理解させる。
- 6 発見した美を表現活動に応用したり、発見することによって、生活を豊かにする態度をつくるようにする。

昭和34年度〔3〕

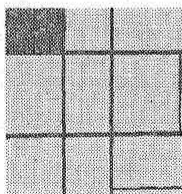
正答率 166.6% □ 88.0%

つぎの6枚の写真のうち、A、B、E、Fは絵画を、Cは工芸品を、Dは建築物をうつしたものである。これをみてつぎの間に答えなさい。

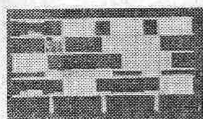
イ。AとBには、とくに共通な要素がある。これと同じ要素をもっているものをC、D、E、Fの中から二つ選んで、その符号A（ ）（ ）の中に書きなさい。

ロ。また、AとBには、とくに異った点もある。これについて下の文の中からもっとも適当と思うものを一つ選んで、その符号を○でかこみなさい。

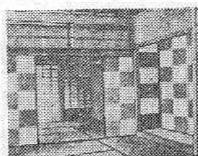
- a. Aは静的で、Bは動的である。
- b. Aは直線構成で、Bは曲線構成である。
- c. Aは^{ちゆう}抽象的表現で、Bは写実的表現である。



A () () B



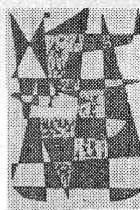
C



D



E



F

問題のねらい

作品の画面構成には、それぞれ表現意図の異なった特徴がある。それを感じとったり、理解したりすることも鑑賞の助けになる。

その力をみるのが、この問題のねらいである。特にそれが、純粹芸術の枠内にとどまらず、広くデザイン作品にもおよぶことを期待している。

生徒の困難点

イ 生徒が物をみる時、表面にあらわれた個々の部分にとらわれて、全体の感じをとらえることが困難である。

特に、B図のシャバンヌの作品は、写実風に描かれているので、A図との共通点をとらえることがむづかしい。

しかし、一応の鑑賞眼ができていれば、垂直、水平の線による単純な構成であることに気づくであろう。

ロ A、B二作品の異った点は、三つの選択肢があまりにも、はっきりとした示し方をしてあるので、まず困難はなかったようである。

指導上の留意点

イ 鑑賞教材……指導の目的から、生徒の能力から考えて、効果的な教材を選ぶべきである。たとえば、同一作家の作品でも、構図上、はっきりした特色のあるもの、題材的に生徒の身近なもの、作風的に特色あるもの、美術的に大きな意義をもつもの、等の観点に立って選択し、これが指導に当っては、その特色を生かすような、重点的な取り扱いがなされなければならない。

ロ 作品の比較や類別……作品鑑賞の方法としては、ある一つの作品を、構

図、配色、題材等について、深くつっこんだ指導をするのもよいが、時には、ある同一系列の作品を見せ、時には、対立的な作品をみせ、このような類比や対比を通じて、鑑賞力の俊敏化を図るのも効果がある。

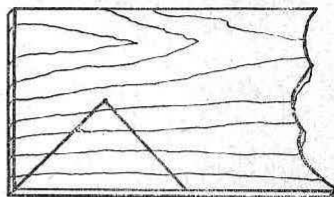
これは、美術作品のみでなく、自然物や、日用品の鑑賞も同様である。

Ⅳ 工 作

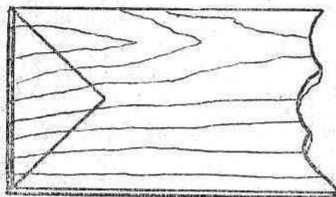
昭和 30 年度 [2]

正答率 15.9%

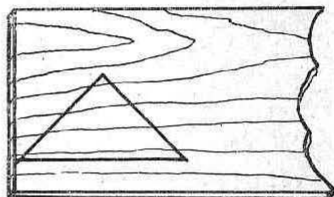
額ぶちのかどが離れないように、裏からあて木をすることにした。あて木の木どりは、下の図のA, B, Cのうちどれがよいか。もっともよいと思うものを一つ選んで、その符号を()の中に書き、つぎにその理由を二つ書きなさい。



A



B



C

答 ()

理由 { 1 _____
2 _____

問題のねらい

この問題は、額ぶちのあて木の、木どりのしかたに関係した問題であるが、この問題をとおして、木材加工における木どりの、一般的な基礎的知識・理解が、どの程度身についているかをみようとする問題である。

この問題と関係する、基礎的な知識・理解の内容は、だいたい、つぎのような範囲であろう。

木どりのしかた

1 木どりと木材の性質

- (1) 木材(板)の強弱
 - ・せんいの方向と強さのちがい
 - ・材料の丈夫な使いかた

(2) 木材の収しゅくと変形

2 木どりの注意事項

(1) 材料にむだのない木どりをする

(2) けずりしろを考えて木どりをする

(3) くぎ打ちの箇所を考えて木どる（材料の欠点、きずを考えて）

(4) 砂尻部分は切捨てる

生徒の困難点と指導上の留意点

この問題をみて、「額ぶちの、かどの離れないように裏からあて木をする」ということが、はたして、どんな状況で生徒に理解されていたかということである。もちろん、額ぶちをみる機会が多いのだから、この図のような、三角形のあて木をすることぐらいは、大部分の生徒は知っていたであろう。しかし、この図をみて、さて、三角形のあて木を、どういう状態にあてるのであるか、となると、判断にゆきづまった生徒が多かったのではなかろうか。正答率は15.9%と予想外に低い。

さらに、もう一面、木材は「長手の方向に木目が通るようにしないと弱い」ということや、「けずりしろをとって、木どりをする」ということが、基礎的な知識として、どの程度理解し、経験していたかということである。このような、三角形の形や、小さな部分品になってくると、その材料によっては、判断のつきかねることがあろうと思われる。

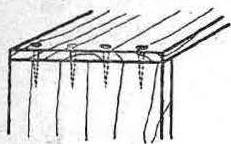
こうした小さい部分のけがき（すみつけ）をするときは、工作のしやすいことからいって、板は、仕あげけずりをした上でけがきをする、といった、通常の作業工程とちがった順序で、実習の行なわれることが多い。

こうした学習は、必ず製作実習を経ているわけであるが、それが単に、生徒を受動的な立場において、教師の命ずるままの作業計画にしたがって、個々の作業が行なわれるという状態であって、こうした科学的、合理的な判断を必要とする技能は、身につけてこない。

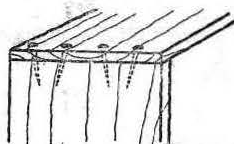
あくまでも、生徒の自主性を尊重し、設計の段階から、すでに全体的な作業計画のみとおしをたてさせて、作業をはじめるといった指導が必要である。

つぎの図は、木箱の一部分を示したものである。

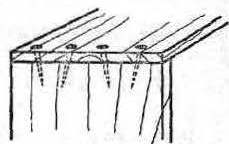
1・2・3のうち、どれがよい作り方か、釘の打ち方、板のつかい方からみて、もっともよいと思うものを一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。



1



2



3

問題のねらい

木材接合のしかたのなかで、釘づけによる接合のしかたの知識とあわせて、木どりにおける板のつかい方についての、実際的な知識・理解をみようとする問題である。

まず、この問題を解くために、生徒が身につけていなければならない、技術的な関連知識をあげてみよう。

1 くぎづけによる接合 <木材の構造と性質の理解>

(1) 木口に、くぎ打ちをするばあいの保持力、および板の厚さと、釘の長さの関係

(2) じょうぶな釘うちのしかた

2 木どりの板のつかい方

(1) 板の木裏、木表の区別

(2) 木裏、木表のそりを考える

(3) 木材の美しさを生かすくふう

技術的知識としては、最少限、以上のことが、関連的に理解されていなければならない。

生徒の困難点と指導上の留意点

この問題と、とりくんで考えることは、まず、釘はまっすぐ打つべきか、V字形に打つ方がよいのか、ということと、さらに、板の使い方について、木裏と木表の、どちらを外側に出すべきかの判定ということである。

もちろん、ねらいにあげた、関連知識についての理解を、総合的にはたらかせて判定することになると思うが、問題は、図をみながら考える関係上

釘のうちかた……まっすぐか——V字形か（図(1)と図(2)(3)の比較）

板のつかい方……木裏が外か——木表が外か（図(2)と図(3)(1)の比較）

というような、考え方のみちゆきをとりやすいのではないと思われる。

1 釘のうちかたについて考えてみる。

まず、誤答をしたと推定される生徒について考えてみると、木材の構造と、釘のぬけないための保持力の関係について、一般的な理解がなされていなかったといえよう。知識を、実習と結びつけて学習させないために「釘は、まっすぐ、外に出ないように打ちなさい」といった、注意事項のほうがよく頭の中にはいっていて、釘うちとは、まっすぐうつものとのみ理解されてしまうのであろう。事実、釘とはまっすぐうつものだと思っている生徒は意外に多い。

この技術指導は、木材接合の一方法としての、釘の打ち方を、技能要素としてとり出して、釘づけのしかたと、木材の保持力の関係や、じょうぶさなどを実験的に実習させなければ、木箱や、本立の組立の過程において、ただ一回、経験させた程度では身につかない。

2 板のつかい方について考えてみると、

木材の構造上からみて、木材の収しゅくは、どう変形するのか、木表と木裏はどのようにしてみわけるのか。収しゅく関係からみて、なぜ、木裏を外側にするのか、といった知識については、実習の過程において、実物で、実際にそくして指導しておく必要がある。

この教科の学習は、必ず、製作実習を経なければならないわけであるけれども、いかに、実習をやらせたからといっても、技術的実践とあわせて、科学的な原理、原則についての指導をしなければ、単に、実習をしたというだけで、確実な基礎的技術として生徒の身にはつかないのである。

実習することによって、理解が確実になるとはいえ、あいまいな実習であったために、かえってこの問題がまちがう結果にもなる。そうした点について、指導上特に留意する必要がある。

イ. つぎのうちから木版木として適当なものを二つ選んで、その番号を○でかきなさい。また、それが適するものはなぜか。材質の特徴を——の上にかきなさい。

1. まつ 2. ほお 3. せん 4. かつら 5. きり 6. かし

答

ロ. 昭和32年度〔2〕ロ 工作 参照

問題のねらい

木版画の版木として適する木材や、その材質の特徴などについて、どの程度経験し、理解されているかをみようとする問題である。

この問題からみて、基礎となる関連知識は、つぎのようなものがある。

1 木材の性質と用途

- (1) 細工材 (2) 建築材 (3) 建具材

2 彫刻材としての特質

- (1) 質(木目) (2) 光沢 (3) やわらかさ

生徒の困難点と指導上の留意点

木版画の、版木の材料としての特徴を、しっかりとつかんでいることと、さらに、この問題にあげられた、木材の質、光沢、やわらかさを考えながら、比較検討をして、木版画の版木として適当な木材を選び出す、ということになるわけだが、とにかく、木材の性質や用途について、全体的に、一つのまとまった体系として整理されておらなければならない。

1 木材の性質・用途

(1) (例)

用 途	木 材 名
建 築 材	松, 杉……………
建 具 材	かつら, もみ……………
細 工 用 材	ほお, かつら……………

(2) (例)

分類	木材名	材 質 の 特 長	主 産 地	主な用途
し ん よ う 樹	杉	軽くてやわらかい・辺材はうす黄色・心材はうす赤色・耐湿性・加工しやすい・耐火力に乏しい・塗装ばえはしない・手に入れやすい・楕が安い	全国とくに秋田・和歌山・奈良・愛知・静岡	建築・建築器具・家具・器具
	松	帯紅白色・比かく的やわらかで、ねばりづよく、そりとさけが少い。耐湿性・細工しやすい・塗装ばえする・光沢あり	高知・奈良・長野・岐阜・三重・栃木	建築・建築材・型・材・土・木・た・る・お・け
	あか松	辺材は帯黄白色・心材は帯黄褐色・比かく的やわらか・あぶらが多い・耐湿耐水性	国内いっばん	建築・土木
	くろ松	辺材は帯黄白色・耐湿……		

(一部抜粋)

2 版木としての適材

質——密——もろい (ほお・かつら・なら……せん)

光沢——ある——ない (けやき……)

やわらかさ——かたい——普通 (かし……)

以上のような表として整理し、指導をするということが、普通にとられる方法かと思われるが、しかし、こうした単なる知的な認識のさせかたでは、理解が大変浅いということである。

やはり、製作実習の経験、なかでも、版面製作に、いろいろな材料を使って製作したことの経験こそ大切である。

そうした、直接的な指導のあまりなされておらないことが、正答率(19.1%)の低いことをみても裏がきざれていることがわかる。

もっとも、最近では、版木としていろいろな材料が用いられるようになった関係上、この問題にあげられた木材以外の材料を使用している生徒は、適当な版木の選択にとまどうことにもなったろう。しかし、通常一般的に用いられる木版の版木について考えるという立場で、この問題をみていきたい。

昭和 32 年度〔2〕ロ

正答率 71.9%

イ. 昭和32年度〔2〕イ 工作 参照

ロ. 一般に、家具や、器物を塗装するのは何のためか、そのおもな目的を二つ答のところに書きなさい。

答

答

問題のねらい

この問題は、塗装の目的に関する問題であるが、単に、生徒が考えている、簡単な塗装の認識についてみるというだけでなく、正しく、目的そのものの理解をはっきりさせるためのねらいであって、合理的な塗装の種類や、方法の理解までも、関連的にみようとねらったものと思われる。

生徒の困難点と指導上の留意点

この問題のねらいからみて、関連する基本的な学習内容をあげてみるならばつぎのものがある。

- 1 なんのために塗装をするのか……塗装の目的
- 2 塗装にはどんなものがあるか……塗装の種類
- 3 塗料にはどんなものがあるか……塗料の種類
- 4 塗装はどのようにしてやるか……塗装の技術

以上の学習内容が、基本的に指導され、生徒の身についた知識・理解となっていなければならない。

塗装に関する生徒の学習や、一般的認識では、ただ「きれいに仕あげる」「色を塗る」くらいに考えている場合が多い。その程度では、技術として生徒の身につけさせるといったようなことは、ほとんど考えていないことになる。

実習は、簡単な塗装の一経験だけで終るといった実情が多いようであるが、そうした機会に、その実習を通して、上にあげたような内容について、体系的には握させるように指導する必要がある。

しかし、それも単に、教師から与えられた塗料をぬる、といったような、生徒の受動的な学習であってはならない。

- (1) 塗装すると、その表面はどうなるか……塗装したそのものの現象を、はっきりと認識させること。この直感が大切である。
- (2) 塗装したあとと、する以前の、作品の表面のちがいを……作品の材質をいかした塗装のしかたについて理解させること。

こうした内容の学習は、材質そのものの性質と関連づけて理解させるよう指導することが大切である。

- 作品の塗装した感じ
- 塗装による作品の保護

これらの理解もやはり、生徒が自分の作品を通した経験のなかから、明きらかになるものであろう。

昭和 33 年度〔1〕口

正答率 55.3%

つぎのイ、ロの写真は、デッサンと版画の製作中の一場面である。^し姿勢または工具のとりあつかいからみて、よいと思うものの番号を、それぞれ○でかこみ、そのおもな理由を書きなさい。

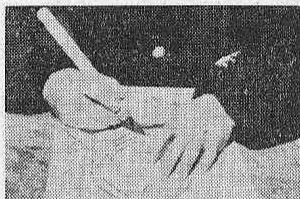
イ、昭和33年度〔1〕イ 描画参照

ロ、

1

2

(理由)



問題のねらい

この問題は、版画製作中の、彫刻刀の使い方、手の位置、版木の位置などに関しての、実際的な技術的知識・理解をみようとした問題である。

この中に含まれる、関連的な技術的知識としては、

- 1 刀の持ち方 • 刀の握り方 • 刀の状態
- 2 左手の位置 • 前方 • 手元 • 親指の動き
- 3 版木の位置 • 正面 彫り易い角度

以上のような内容があげられるであろう。

これらが、最低限理解されていなければならない。

生徒の困難点と指導上の留意点

この問題と取り組んで考えることは、まず刀の持ち方はどの持ち方が合理的か、版木の位置はどうあるべきかの検討が必要となる。

そうしたことについて、写真から総合的に判断するとなると、

- 刀の持ち方
- ・鉛筆をもつように握る……逆手五指で握りしめる。
 - ・左手は離して刀にふれない……左手の親指で刀をささえる。

版木の位置

- ・正面に正しく……彫り易い角度に傾ける。

といった考え方のすじ道をとるであろう。

刀の持ち方については、どうしたら力が入り、自由に方向を変えて彫ることができるか、といったことは、直接、経験を生かした判断が必要である。

また、どのように持っても彫れるのであるから、最も危険が少なく、しかも合理的な使用法によって彫刻をするといった、実際の指導を、平常からしておかなければならない。

- ・右手で鉛筆をもつようににぎる握り方……安定性、危険防止
- ・左手の親指で刀をささえる……安定性、危険防止、方向づけ

このような点を指導しておけば、図の(1)と(2)を比較しながら、総合的に判断ができるであろう。

版木の位置については、図(1) 図(2)の、どちらの状態もありうることであるが、この問題の場合においては、刀の持ち方の正しい判断を主にして考えて、版木の位置について検討すべきであろう。

ともあれ、常に彫り易い角度に傾けて掘る習慣をつけておくならば、問題ではない。

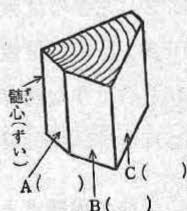
昭和34年度〔2〕イ

正答率 15.0%

つぎの間に答えなさい。

イ. 右の図は、彫刻^{ちようこく}をするための木取りの一部分である。この側面A、B、Cにそれぞれ適当な木目をかきいれ、また、その木目の名称を()の中に書きなさい。

ロ. 昭和34年度〔2〕ロ 色彩参照



問題のねらい

彫刻をするための木どりは、材料のじょうぶな使いかたを考慮することより

も、木材の美しさを生かすくふうに、重点をおいて木取ることがある。この問題の図のように、木取った材料も、各側面に、美しい木目があらわれるように考えて、製材されたものといえよう。

ここでは、その素材の各側面にあらわれる、木目の名称と、その書き入れかたを問うことによって、生徒の理解している木材の構造や、板材の種類、および、木目のあらわれかたのちがいなど、種々の関係知識の理解をみようとしたものである。

生徒の困難点と指導上の留意点

この問題を解くために、生徒が理解していなければならない、最低限の知識内容をあげてみると、

1 木材の構造

- (1) 心材と辺材 (2) 年輪と木目

2 製材のしかたによる板材のちがい

- (1) まさ目材 (2) 板目材

3 板材と木目のあらわれかた

- (1) 板目、まさ目 (2) 木裏、木表

以上のことがあげられるであろう。

さて、これらのなかで、中心となる点は、製材のしかたによって表面にあらわれる木目が、どう変わるかということである。

この場合は、製材というより、材料をどう切断したら各断面に、まさ目と板目の木目が出てくるか、ということがよく理解されていなければならない。

しかも、それらが、木材の構造上の理解にうらづけられた知識として、身につけていなければ、生きた知識としてはたらないし、この問題も解けないということである。

問題は、単なる板材の、まさ目材や、板目材の判定とか、木目のかき入れとちがって、素材は木塊であり、三つの切断面がある。そのことが、問題の複雑さを増し、生徒の判断に困難を感じさせる点と思われる。

正答率15%であることをみても、そうしたことがうなずけるであろう。とかく、このように問題が総合的になると、生徒の判断の中心がうすれてくる。

ともかく、このような立体的な木材の使用は、学習のなかにとり入れられておらないというのが現実であろうと思われるが、それにしても、しっかりと基礎的な学習がなされておれば、こうした総合的な問題も、さほど困難を感じるとは思われない。

要素的に、木材の構造、まさ目板、板目板、木表、木裏を理解していても、それらが、木材の構造と関連的に理解されるよう指導されておらないと、生きてはたらく知識とはなり得ない。

しかも、それが黒板と講義だけでなく、実習を通して、正しく指導しておくことが一層重要となってくるのである。

V 実 技

昭和 30 年度 (実 技)

正答率 51.8%

クッションの図案を、右に示したわくを輪廓^{りんかく}にしてかきなさい。その図案は、つぎの条件にしたがって、単純で、力強い感じのするものになさい。

- ・ただし、画面の分割をしたり、直線や曲線をかきいれたりすることは自由である。
- ・模様は、単独模様でも、連続模様でも、自由模様でもよい。

条 件

- | | |
|------------------------------------|----------------------------|
| 1 リンゴを半分にした形を想像して、これを便化し単位模様とすること。 | 3 クレヨンの色数は、5色以内とし、適当に選ぶこと。 |
| 2 葉はかきいれないこと。 | 4 黒色はつかわないこと。 |
| | 5 重ね色や、混色はしないこと。 |

注意＝上の条件にあわないと、減点されるから注意しなさい。

(あたえられた画用紙のわくの大きさ。縦190mm 横190mm)

問 題 の ね ら い

図案は、美と用の両面にわたる造形であるから、用の規定する条件を無視することができない。

その一定の枠内で、いかに作者の創造性、芸術性を生かすかということになるが、ここでは、クッションの図案として、リンゴを便化構成する力をみようとしている。すなわち

- 1 与えられた枠内で、いかに図案が美的に充填構成されたか。
- 2 リンゴを素材として、それをいかに観察し、分解し、抽出し、拡大して効果的な便化が行われたか。
- 3 配色がいかに美しく表現されたか。

が重要なねらいとなる。

なお、本問題のように、既成物を素材として便化する時は、それがどのように自由に便化されたとしても、リンゴのもつ特性や内容は、最後まで表現されなければならない。

生徒の困難点

従来、図案は軽視されてきたし、また、一部に熱心な教師は、抽象的な図案にはいってしまって、便化はあまり関心がもたれていない状態ではなかったろうか。

つぎに、クレヨンの色が、5色に限定されているし、重色、混色はいけないという制約があって、個性的な創造的色彩がだしにくいとも思われる。単位模様、単独模様、自由模様、便化、画面の分割などのむつかしい言葉がならんでいるが、こういう言葉は、ひととおり指導されなければならないとはいえ、なかなか、生徒の身には親しまれていないようだ。そんな点も生徒の考えを混乱させることになってはいなかっただろうか。

指導上の留意点

1 基礎的図案と応用図案

図案は本質的には、用を無視してはなりたたない。しかし、その基礎として純粋に美の構成を目ざす学習もあるべきである。

用を離れ、何等の条件もなくして、点、線、形体、明暗、色彩を駆使して自由な美的構成を練習することが、美の基本原理のは握を強め、応用図案に生かされていく。

2 自然の中から美の素材を

自然は美の無限の宝庫である。水の波紋に、電線の交錯に、木の木目に……注意してみれば、図案の素材はいくらでもある。それを発見し、創造の手がかりとすることも、図案学習の一つの心構えである。

しかし、その場合、いかに便化しようが、自然のもっていた特性を離れず、それをあくまでも生かす気持が大切である。

3 図案構成の基礎を理解させる。

既成物の形体を単独に、または、二方連続・四方連続と、リズムカルに配列し、または、模様化し、分解構成して、図案構成の理論を理解させる。

右のわくの中に、透明のガラスコップ一個と、音楽の教科書一冊を、つぎの条件にしたがって、4Bの鉛筆でかきなさい。

＜条 件＞

- 1 上の二つを、机の上に置いたものと考えて、おもしろく組合わせた構図にすること。ただし、机の縁やバックは、かかないこと。
- 2 明暗の調子をつけて、コップと本の質感をできるだけあらわすようにすること

＜注 意＞

- 1 ガラスコップは、模様のない普通の形のものとし、その置き方は自由である。
- 2 本は、開いても、とじて、立ててもよく、文字や、楽譜は、かいても、かかなくともよい。
- 3 光の方向は、自由にきめてよい。
- 4 光によって机の上に見える影は、必要があればかいてもよい。
- 5 消ゴムは、つかってもよい。

(あたえられた画用紙のわくの大きさ 縦185mm 横225mm)

問 題 の ね ら い

- 1 与えられた画面に、コップと本が、変化や統一をもってうまくおさまられたか。
- 2 明暗の調子が、正しく、美しく表現されたか。
- 3 二つのものの形が、見る角度や方向にしたがって、正しく描かれたか。
- 4 ガラスや本の質感が表現できたか。

以上が主なるねらいで、要するに、それらが総合されて、デッサンとしての美しさが出ていなければならない。

生 徒 の 困 難 点

1 生徒の中には、客観的な、正確な描写にすぐれているものもあり、また形は不正確であるが、個性的なおもしろ味のある描写を得意とするタイプもあるので、後者のタイプの生徒には、苦手の問題ということになろう。

2 ガラスのコップは、透明であるために背後のものが微妙に映ってそこに複雑な美をあらわすが、目の前にそれがなく、考えてかくのであるから、その質感描写は、相当、困難を感じるであろう。

3 見る角度や、目の高さによって、その形が変るわけであるが、それが、コップと本という二つの組合せということになると、随分むづかしいことになる。

指導上の留意点

1 物をデッサン、または、写生させる場合、教師が組合せたものを、そのまま描かせるという場合のほかに、その組合せを生徒にも行なわせ、それを互いに批判し合うようなことも必要である。

2 下図ができたら、いきなり着色させるのではなく、その下図をみせあって構図についての批判をしたり、何枚かの紙に下図をかくて、どれが一ぱんよい構図かなどを、反省することも一つの方法である。

3 デッサンの際、生徒は、正確な形や明暗には注意するが、質感表現までは、なかなかおよばない。

写生の際には、描く前に、じゅうぶんこれらの美しさを味わってから描くことがよい。

4 古今の名画を鑑賞することによって、明暗や質感表現の巧みさや、美しさを感じさせるなどもよい方法である。

(参考例) ……シャルダンの静物画。ダヴィンチのデッサン。

デューラーの人物画およびデッサン。

昭和 32 年度 (実 技)

正答率 51.6%

下のわくの中に、いすに腰^{こし}をかけている人物を、つぎの条件にしたがって、4B^{えんぴつ}の鉛筆でかきなさい。

<条 件>

- 1 中学生くらいの年ごろの者をかくこと。
- 2 正面からみた、全身像をかくこと。
- 3 かき方は、線^{ゆか}がきを主とし、かるく明暗をつけること。
- 4 バックや床はかかないこと。

<注 意>

- 1 人物は、男・女どちらでもよい。
- 2 人物の姿勢^し、手・足の位置やその置き方は自由である。

- 3 人物の服装は自由である。
- 4 いすは、どんな形でもよい。
- 5 消ゴムはつかってよい。

(あたえられた画用紙のわくの大きさ 縦230mm 横204mm)

問題のねらい

- 1 人物の形が大体かけ、頭、胴、手足のプロポーションが美しくかけたか。
- 2 線が概念的でなく、のびのびと自由に描けているか。
- 3 人物が固くなく、生き生きとした動勢をもっているか。
- 4 人物が平面的でなく、線や明暗によって量感を表わしているか。
- 5 人物が腰かけているという感じが表われているか。
- 6 人物が画面上に丁度よい大きさと、位置でおさまっているか。(構図)

以上のような観点から総合して、生徒の描写力をみるのがねらいである。

生徒の困難点

1 人物クロツキーや、人物写生をふだんやっていないと、形をとることに主力を注いで、大切な動勢や、量感などの表現に困難するであろう。

2 人物を描く場合、生き生きとした動勢を表わすことが、最も重要であるが、中学生の年齢からいって、客観的な表面描写や、概念的な表現に走り勝ちである。

3 腰かけている人物は、横むきならば比較的容易であるが、前からみた形は、よほど描写力がないとききにくいと思われる。

4 モデルをみないで、描くのだから、そういう表現方法の困難もある。

5 モデルをみてかいても、生徒は、部分的にみる傾向があるので、全体からみでの各部のバランスをうまく表現するのはむづかしい。

指導上の留意点

1 題材としての人物画

人物は、他の静物や風景よりも生徒に親しみがあるし、ポーズをかえることによって、無限の変化を生ずる。それに、季節に関係なく、何時でも得られる

題材として、最も好適である。

2 全体として、各部のプロポーションや、バランスに注意する。

生徒は、部分に気をとられ、特に顔を似せることにこだわって、全体としてのバランスを忘れがちである。常に全体としてのバランスに留意すること。

3 動勢に注意すること。

人物の特色あるポーズを描いても、生徒は外形的な表現に追われて、人形のように生氣のない絵になりやすい。生き生きとした動勢をとらえることを、人物画の中心的なねらいとして、徹底的に描写されなければならない。

4 線やタッチ

動勢表現は、線やタッチの生き生きとした運びによってできるのであるから人物クロッキーなどで、できるだけ数多く練習することが大切である。

5 名画鑑賞

以上のことは、名画によって鑑賞すれば、生徒の理解は一そう深まるであろう。

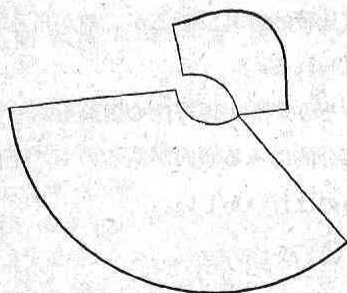
(例) ドガ、ゴッホ、マネー、ロートレックの作品など。

昭和33年度 (実技1)

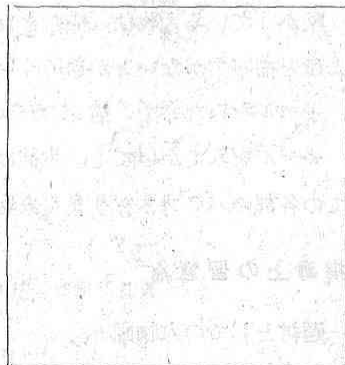
正答率 24.7%

下の展開図を見て、そのもとの形の見取図を、わくの中にかきなさい。

- (注意) 1 外形の特徴がはっきりわかるようにかくこと。
2 明暗や陰影は、つけないこと。



(上の展開図の細線は切り開いた部分を示す。)



問題のねらい

紙や板金を折りまげて作る作品は、どんな形に材料を切断するか、あらかじめ展開図で表わす必要がある。

この問題は、円すいの展開図を示し、製作しようとする品物の原形を再現させ、それを見取図でかかせることによって、製図の基礎である展開図の読み方や、かき方についての能力をみようとした問題である。

生徒の困難点と指導上の留意点

この問題の展開図をみて考えることは、第一に、これはどのような立体であるかということである。そしてつぎに、これをどのような見取図に書くべきかということである。

1 まず気がつくことは、図の下部の展開図は、扇形であるということから、「円すい」の展開図であるということは、だれもが容易に理解されたことであろう。

しかし、それも実際の製作学習のなかで、経験をとおした理解でないと、上部と下部の二つの部分にわけて考えることができなかったかも知れない。

ともあれ、上部の図もやはり、円すい形の展開図であって、特殊な変形したものであるということが、読みとれなければ、この問題は解決されない。

さて、上部の図も、円すいの展開図であることが理解できた生徒も、太い実線で示された変形曲線から、どういう円とうの切口を推定したか、すなわち、その切口の見取図のかきかたに最も困難を感じたものと思われる。

それらの理解が、確実に身につくための基礎となる学習内容は、

(1) 正しい展開図の知識・理解……(製図の基本法)

イ 展開図の意味 ロ 円すいの展開図の書き方、読み方

(2) 正しい見取図の書き方……(図法の理解)

イ どのような方法で見取図をかくか。

これらの内容が、知識としてでなく、実習を通して理解されることが大切である。

こうした円すいの展開図は、識業・家庭科において、基礎製図や板金加工の

工作図をかくときにも学習される機会があり、また、数学においても学習される内容である。

そうしたことが基礎になって、「メガフォン」とか「ロート」といった物体が、想像されたものと考えられる。

2 さらに、展開図をみて、は握した立体感を見取図に図面化する必要がある。このことについては、明確な見取図の意味を理解している必要がある。

見取図とは、品物をみながら、フリーハンドでかいた図面が見取図（スケッチ図）で、既製品の形、寸法、構造、材料などを調べて、同一の品物を再現したり、修理、または改造したりするときに使うための図面と考えてよい。

各学校における見取図の、書き方の指導は、製品をみながらスケッチをさせるといふ学習がほとんどであろう。この問題のように、展開図から原形を想像し見取図をかくということは、あまりなされておらないのが実情のようである。この辺にもこの問題の困難点があったとも思われる。

とにかく、この問題は、一度でもこのような製作実習をおこなった経験をもっているかどうか、大きなかぎとなる。

昭和33年度（実技2）

正答率 24.7%

マッチ箱一個（家庭用の普通小型）の中箱が、半分引出された形を、下のわくの
中に、4Bの鉛筆でかきなさい。

- （注意）
- 1 光線せんの方向を自由に定め、それを矢印でわくのすみに示すこと。
 - 2 光線せんの方向にしたがって、明暗と陰影えんえいをつけること。
 - 3 マッチ箱のもようやマッチの軸木じくや合は、かかないこと。
 - 4 わくの大きさにあわせて配置を考え、適当な大きさにかくこと。
- （あたえられた画用紙のわくの大きさ 縦105mm 横17mm）

問題のねらい

- 1 マッチ箱の形が正しく（透視法的にも）描かれること。
- 2 光の方向により、マッチの明暗が正しく描かれ、その明度の階調が美しく立体感が表われること。（特に引き出された中箱の内部）
- 3 床の上の影の強さや方向が適正に描かれること。

4 画面に対して、その大きさや配置が適正で美しいこと。

以上がおおよそのねらいであるが、それらが総合されて、作品としての美しさが表現されなければならない。

生徒の困難点

1 立方体や、直方体は簡単のようであるが、それを正しくかくことは、生徒には案外できないのである。

2 中箱が引き出されているために、内部の明暗関係が複雑となり、これを想像で描くのはむづかしい。

3 床の上の影は、光の方向や見る目の高さによって、その方向が変化するからそこにも難しさがある。

4 マッチ箱は形が小さいので、画面一ぱいに大きく描けば、チョーク箱のように大きく感じられる絵になるだろう。そんなところにも適当な大きさをきめるのにまごつくこともあろう。

指導上の留意点

1 形の正確さ

特にデッサン力にすぐれた生徒は別として、やはり一般的には、透視法的な理解が基礎にあれば、描く助けになるだろう。

透視法的な理解を、強く考えると、絵を概念化させる危険はあるが、物を正しくみ、正しく表現する一つの手段と考えて指導しておきたい。

2 反射光

明暗、陰影を表現するとき、実際には周囲の壁や床の反射のために、暗部にも微妙な明かるさが現われる。それをみつけ描くことによって、その絵に一そう実在感が表現されるのである。

写生の際、これに注意させたり、名画の鑑賞によって、その美しさを味わわせたりしたい。

3 構図について

対象を画面におさめるとき、その大きさ、位置、方向によって同じものでもさまざまに変化する。

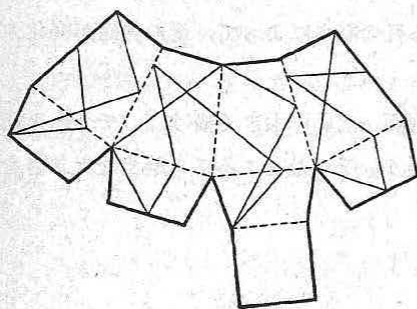
写生の際には、それらを考えて、最も自分の気持ちにあった美しさを発見するように努力することも大切である。

昭和34年度（実技1）

正答率 28.0%

下の図は、筆立を作るための展開図である。破線は折り目で、細線は模様の線である。右のわくの中に、この筆立の見取図をかきなさい。（模様の線もかき入れること。）

- （注意） 1. 見取図は、わくの大きさにあわせて配置を考え、適当な大きさにかくこと。
2. 明暗や陰影^{いんえい}は、つけないこと。



問題のねらい

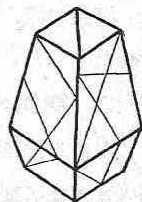
この問題は、33年度の実技と同じく、角形の筆立の展開図を示し、その原形を見取図でかかせ、展開図の読み方、かき方についての能力をみようとした問題である。

生徒の困難点と指導上の留意点

この問題は、箱形で変形した筆立の展開図のみ方を中心に出題されていて、33年度の円すいの展開図のよみ方をみる問題よりは、容易な問題だったと思われるが、予想に反して28%と正答率は33年度に比べて低い。

1. どのような立体かということは、おちついて考えれば図のような中太の立体感が容易に浮んでくるものと思う。

しかし、部分的なことにとらわれて、全体を見失うという点があったのではないだろうか。



すなわち、模様の線がはいっていたために、判断をあやませたと思われる点である。

この模様については、問題をよくよんで、はじめから模様として受けとめ、おちついて問題ととりくめば、正答率は33年度より低くなるはずはあり得ないと思われる。

まず、模様の線はないものとして考え、破線を中心にしていくつの面があるか、全体はおおよそどんな形をしているか。といった順序でとらえてゆくことになろうが、第二のつまずきは、いくつの面があるかをつかむことが、やはり困難であったと思われる。

四つの側面と、底およびあいた上の口……という筆立の立体感は、だれもが気づくことである。しかし、側面が二面構成になっているために、その外形（上下部細く、中太い）の、はあくがむつかしかったのであろう。

こうした展開図の理解に必要な指導内容として

(1) 展開図の読み方

(2) 製図の基本、線の種類と用途

をよくのみこませておくことである。

また、展開図によくなれさせておくということであり、実習をもとにした指導がなされているということである。

2 さらに、は握した立体感を、見取図に図面化することである。

こうした見取図は、図工の学習においては、一般的に、斜形図か透視図法でかく学習指導が多いようであるが、技術教育的な観点からみれば、見取図を第三角法（第一角法）でかく指導も必要である。

この問題の場合、もし第三角法で見取図をかく方法をとれば、いたって簡単に図示できたと思われる。

図工教育においても、三角法による見取図の書き方を、斜形図法や、透視図法とあわせて指導しておく必要があるのではなからうか。

平面上においてある電球（家庭用のふつうのもの）を、下のわくの中に、4Bの鉛筆でかきなさい。ただし、おいてある平面はかかないこと。

- （注意）
1. 光線ひかりの方向を自由に定め、それを矢印でわくのすみに示すこと。
 2. 光線ひかりの方向にしたがって、明暗と陰影をつけること。
 3. 斜ななめの方向からみたようにかくこと。
 4. 電球の内部の構造、表面にしるされた文字、記号はかかないこと。
 5. わくの大きさにあわせて配置を考え、適当な大きさにかくこと。
- （あたえられた画用紙のわくの大きさ 縦127mm 横182mm）

問題のねらい

- 1 電球の球体の明暗が正しく描け、立体が表現されたか。
- 2 電球のガラスや金属の部分の質感が表現されたか。
- 3 床の上の影が光の方向や見る角度の関係において正しく描けたか。
- 4 画面の中に電球の大きさや、位置が美しく構図されたか。
- 5 線やタッチに変化や抑揚があり、生き生きとした感じが表現されたか。

以上を総合し、その明暗の階調が正しく美しく表現され、実在感が出ていなければならない。

生徒の困難点

1 明暗の表現については、生徒は割合に単純であって、微妙な美しい階調を発見することがむづかしい。特に電球は、せっこう像のようなはっきりとした白さをもたないので、明暗の現われ方も複雑である。

2 電球は、球体であるために、面と面で明暗のはっきりした変化を見つけるというわけにはいかず、きわめてむづかしい。

それがひいては、他の立方体や、直方体に比べて奥行きを出すことのむづかしさともなるだろう。

指導上の留意点

1 球体のデッサン

自然物にも、人工物にも球体はきわめて多い。

そういう球を球としてとらえ、その美しさを味わったり、表現したりすることは、図・工学習においても重要なわけである。

ボール、壺、土瓶、せっこうの幾何形態等、生徒の身近なものをデッサンして球体表現になれさせる。

2 質 感 表 現

生徒にとって、形や明暗や色彩は、概念的にでもとらえやすいが、物質感や材質のもつ美を味わったり、表現することはむづかしいようである。特に色彩を使った写生の場合は、色さえ塗ってしまえば絵が完成したと思ってしまう。その意味でもデッサンによって材質感を追求させることは大きな意味がある。

その指導に当たっては、描く前に、じゅうぶん質感に対する関心を持たせるようにしなければならない。

なお、これについては、参考になる名画を鑑賞させるのも効果があろう。

ま と め

この研究は、最近五か年間の、本県高校進学学力検査問題とその結果について検討し、図画工作科の学力の実態と、学習指導上の問題点を探究しようと試みたものである。

すなわち、問題のねらいと、生徒が困難を感じたと推定された点、およびそれに対する指導上の留意点を述べてきたのであるが、全体を通じて、感じた学習指導上の留意点を要約すると、つぎのようになる。

1. 鑑賞指導の不振

名作や造形品の鑑賞に関する問題は、写真をのせ、あるいは、用紙も考慮して鮮明に、親切に出題してあるが、正答率は案外に低い。

○や×をつけるような、アチーブ式な問題としてならば、必ずしも低くはないが、生徒自身に考えさせたり、発見させたりする面の強い問題には、非常に誤答が多い。

おそらくこれは、施設・設備の不足などで、特別室がなかったり、映写設備がなかったりして、絵画制作ほどに指導が徹底していないのではないと思われる。

そのために、鑑賞指導が知的鑑賞とか、美術史的指導に陥って、生徒の興味を失っている結果ではないだろうか。

鑑賞にたえる、美しく見やすい大きさの資料を豊富に集めるとか、スライドや映画によって拡大してみせるなどにより、はじめて生徒の興味を高め、また、構図や表現効果などの分析的な鑑賞も可能となるだろう。

2. 工作教育の不振（版画を含めて）

鑑賞指導と同じように、ここでも施設設備の乏しいことからか、あるいは材料費がかかるという経済的な理由からか、または、教師の工作的教養の低さからか、工作の基礎的技術、材料に対する理解などの不足が感じられる。

3. 色彩指導が、知的取扱いに終わっている

色彩指導は、実際に色紙や絵具、また色光によって配色してみて、その美

しさや性質が感得されたり、理解されたりするものである。

そういう経験によって身についた基礎的な知識は、問題にぶつかって応用のきく力になるにすぎない。

正答率の低い問題は、そのような欠陥をついていることを示している。

4. 美術用語について

図画工作は、表現にしる、鑑賞にしる、あくまで生徒の創造的活動や感覚的な面を重視するのが、本道であるべきであるが、しかし、それによって得たものを、言葉としてまとめることも大切である。

たとえば、鑑賞によって、そこから美の原則的なものを発見し、それをバランスや、対比や、プロポーションなどの言葉でまとめ、一つの知的整理を行なうこともまた、理解の重要な一面である。

問題によっては、そのような用語として提出されているものも多いが、用語の意味を理解していない為に、解答に困難していると思われる点が見えるのは残念なことである。

5. 美的能力の生活化

純粋美術の性格をもつ表現や、鑑賞は、図工の中核をなすものであるが、これを個人や、社会の生活に生かす面も重要である。

物を配置配合したり、日常使用する造形品を作ったり、デザインしたりする学習がそれであるが、その時に重要なことは、美と用との総合的な見方、考え方であろう。

この点の指導は、一応知的には理解しているとしても、やはり、考案図を描いたり模型を作ったり、調査したり、資料を集めたりする実践的な過程を通らなければ、不徹底に終るであろう。

6. 実技について

実技については、印刷や経費や、実際上の困難性などの点で色彩を使ったり、創造性、芸術性を大きくとりあげたりするような問題を出すことができないため、比較的、デッサンや図案の技術的な面にかたよった感があるが、その不便さの中で何とか、少しでも正常な表現力をみようと努力している。

したがって、この真意を理解せず、図画工作の表現学習が、入試本位にデッサンを重視し、しかも、表面的な外形描写などに陥らないよう注意されたい。

以上、全体を通しての指導上の留意点をまとめてみたのであるが、具体的には、個々の問題によって本研究のねらうところを推察願いたい。

要は、図画工作科の学習は、あくまでも、他の教科とは異なる独自の性格をもち、単に知的な理解に終ることなく、あくまでも、作る、描く、見る、という現実の作業の過程にこそ生きた指導と、真の理解が得られるものであることを知るべきである。

そのための独自の、指導上の留意点が何であるかを、本研究からみいだしていただければ幸いである。

あ　と　が　き

この研究は、最初にも述べたように、当研究所が、昭和34年度から、構想を新たにして着手した「学力と教育条件並びに学習指導に関する研究」の一環として、とりあげられたものであって、この研究紀要は「学力と学習指導——高校進学学力検査を資料として——」の図画工作科編である。

研究方法一般は、全所員の共同研究によったが、図画工作科の分野については、下記の方々から貴重な意見や資料を提供していただいた。

その御協力に対し、ここに深く感謝の意を表する次第である。

新潟県立新潟南高等学校教諭	稲　村　　豊
新潟市立白新中学校教諭	山　田　夏　男
新潟市立関屋中学校教諭	韭　沢　慎　治
新潟市立白新中学校教諭	樋　口　隆　太　郎
新潟市立寄居中学校教諭	近　藤　直　行
東蒲原郡船戸小学校長（前指導主事）	古　田　芳　雄
新潟県教育庁指導主事	山　田　佐　門

なお、当研究所員でこの研究を担当し、この書のとりまとめにあたったのは林　勇であるが、特に、山田夏男教諭の御協力におうところが大きかった。